

直売所で自分の名前の野菜を見て
購入してくれる方がいると、
大きなやりがいを感じます。



農業に懸ける情熱



1 農業に携わることに なつたきっかけ

札幌市の専門学校を卒業後、事務職として勤務していました。結婚後も仕事を続けていましたが、出産を機に会社を退職し、そこから農業に携わるようになりました。

夫とは、地元岩見沢市のサークル活動で出会いました。交際中に義母が育てた野菜を食べることがあり、そのおいしさに驚いたことを今でも覚えています。普段食べている野菜とはまるで違う味わいで、「農家が育てる野菜はこんなに違うんだ」と感動しました。そんな経験から、農家という職業に強く惹かれるようになりました。

農業に携わることに対して特に抵抗はありませんでしたが、実際に農作業をしてみると、初めてのことがばかりで慣れるまでに時間がかかりました。特に乗り物酔いがひどく、収穫機に乗る際は酔い止めが欠かせなかったほか、虫も苦手で逃げ回ることもありました。それでも、体を動かすことが好きだったので、事務職よりも農作業の方が楽しく感じました。

農業に携わって今年で20年になりますが、毎日自分のペースで農業に取り組んでいます。

2 消費者との交流が 大きなやりがい



自宅で収穫した野菜を、J・Aいわみざわの「もぎたて市」や「ご近所やさい」岩見沢市の農家の女性たちが主催する「いきいき母さん土曜日」で販売しています。こうした場で自らが売り場に立ち、消費者と直接顔を合わせて会話できることは、何より楽しい時間となっています。自分の名前の野菜を見て購入してくれる方がいると、大きなやりがいを感じます。

また、そこで出会った農家の女性たちは「消費者にうれしい野菜を届けたい」という思いが共通しており、話しているだけで学びになることがたくさんあります。自然と会話が弾み、気軽に相談できる仲間ができたことは、私にとってかけがえのない財産となっています。

3 女性部活動について

女性部には平成20年に加入しました。加入当初は知らないばかりで緊張していましたが、活動を重ねるうちに徐々に慣れ、楽しく活動に参加できるようになりました。普段は接点のない方々とも、女性部の活動を通じて関わりを持つことができました。

現在は、岩見沢支部の監事を務めています。加入当時と比べると、女性部の人数が減少しているのが現状です。「どんな活動が楽しいか」「どうすれば加入したくなるか」を考えながら、今の時代に合った形で加入促進に取り組んでいきたいと思っています。



人物 memo

岩見沢市西川町
上野 千恵子さん

夫の久志さん、義父の正則さん、義母の梅子さんの家族4人で約24haの農地に水稲や小麦、タマネギを栽培。地元のサークル活動で夫の久志さんと出会い結婚。出産を機に、農業の道に進みました。現在は、女性部岩見沢支部の監事も務め、充実した農業生活を送っています。